　陽が落ちきり、夜の闇が空を覆う頃、ネック一行はようやく『パルバ港』へ到着した。
　御者と別れ、一行は荷物を持って街へと入る。
ぽつぽつとある街灯の火が潮風に揺れていたが、頼りなくて街の様相はよく見えない。
「こりゃ聞き込みは明日だな～」
　伸びをしながらノランが呟いた。
　街に住んでいると思しき漁師ふうの通行人に聞くと、波止場の近くに宿があるという。親切な通行人の案内を受け、一行は無事に宿に到着し、二階の部屋を取った。
「すぐ近くに市場があったね」
　ベッドに腰かけ、リアムが言う。
「市場があるってことは、セリがあるってことだ」
 ネックが言うと、ノアが小首を傾げて、
「セリ？」
「獲った魚を、漁師が仲買人に売る集まりだ。漁師がまとまった場所にいるってのは、俺たちにとって好都合。聞き込みして回る手間が省けるからな」
　ノランは「確かに！」と手を打ち、「じゃ、セリが終わったタイミングで市場に行こうぜ！　真っ最中に行っても邪魔になるしな」
　ネックとリアムが頷き、ノアに目配せをする。ノアも、こくりと頷いた。
「俺、昔セリを見たことあるけどよ。そりゃもう漁師たちが爆弾みたいな大声で叫んでるから、明日はきっとそれが目覚ましになってくれるぜ？」
　ノランが楽しそうに言い、ネックが続けて、
「セリはたぶん日の出前には始まるはずだから、がんばって早起きしなきゃな」
「じゃあ、そうと決まったらもう寝ちゃおう。きちんと起きられるように」
　リアムが言って、ランプを手に取った。
　そうして四人は普段より幾分も早く就寝し、その日の行程を終えた。
　そして、翌日。
　一行は、日の出と共に目を覚ました。